

中村元先生を偲ぶ

著者	?? 直道
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	5
ページ	153-155
発行年	2000-04
URL	http://id.nii.ac.jp/1646/00000525/



中村元先生を偲ぶ

高 崎 直 道

今年十月十日、本学顧問教授中村元先生が逝去された。享年八十六歳。先生はインド哲学・仏教学の世界的権威、そして、ラジオやテレビを通じて、積尊の伝記・仏教の思想をやさしく明晰な現代のことばで解説し、数多くの仏典を現代語訳された方として、全国民にその温顔と共によく名の知られた学者であった。その学問的功勞により昭和五二（一九七七）年には文化勲章を受賞されている。

日本学士院会員、東京大学名誉教授という公的肩書と並んで、あるいはそれ以上に先生が大事にしておられたのが東方学院長の肩書であったのではなからうか。東方学院というのは、先生が東大を定年でやめられたあと、他大学からの招聘をすべて断わって、財団法人東方研究会（これも先生が私財をなげうって予め作られた財団）を基盤として開設された、先生ご自称の「寺子屋」である。今日でいう生涯教育のはしりと言うべき、誰でも自由に聴講出来る公開講座で、仏教をはじめとする東洋の伝統思想および関連語学を教えることを目的としている。講師は先生を筆頭に、先生の知友或いは教えを受けた人々で、教えたい人は誰でも教えることができるシステムと聞いている。先生はそこで、狭い専門分野にしばられた大学の講座体制では得られない真の学問が育つことを念願しておられた。同時に、若

い研究者たちに、東方研究会の研究員とすることによって、大学院修了後の研究継続と講義の場を提供しておられたわけである。

先生の学問と教育の両面にわたる素晴らしいご活躍について十分絞べることは容易ではないが、ここでは本学との関係について、しばらく振り返ってみたい。

先生がはじめて本学と関係をもたれたのは昭和四八（一九七三）年である。東大を定年退官された先生を、当時の渡辺稜雄学長が文学部客員教授に迎えられた。渡辺学長は中村先生にとっては島根県出身の大先輩ということで、一高の学生時代からいろいろと教えを受けられた由、大学で印度哲学科に進まれたについても、それを薦められた先生の一ひとりと承わっている。渡辺学長はその折、具体的にどういう要望をされたかわからないが、多分、中村先生が東方学院を開所されることになって、本学へ教授として迎えることをあきらめられたのではなからうか。昭和五〇年には称号が顧問教授に変更され、爾来、今日に至っている。大学の記録によれば、その間、昭和四九年の精霊祭、および昭和五二年の成道会に、それぞれ講演をお願いしている。

平成七（一九九五）年、本学に仏教文化研究所を開設するに当り、私は中村先生に、その開所式での記念講演をご依頼申し上げた。先生はご多忙の中を喜んで引受けて下さり、「将来の世界をつくる仏教」という演題で、規模宏大な仏教の未来展望図を、歴史的な資料を根拠として論じられた。われわれは東洋が一方的に西洋文化の影響を受けてばかりいると思っているが、それは西洋の宣伝ばかり聞かされているからで、古代においては、仏教その他のインドの思想や文物が西洋世界―ギリシャ、ローマないしキリスト教―にいろいろ伝わっていると、珠数（ローザリー）の名の起原、あるいは合掌の仕方などを例として、演壇の上をジュエスチャーを交えて歩き廻りながら、楽しそうに目を細めて話しをされていたことを、いまでもありありと思ひ出す。

同時に先生は講演の中で、演題の仏教徒が世界をリードするという点について、世界の学者や宗教家の中に、少数ではあるがこういう主張をする人たちがいることと対比して、日本の仏教徒がもっと自覚して、勇気をもって主張すべきだと誠しめられた。たとえば国連という機構も、核の戦力をもっている国々だけが理事国となって、他の国々を、言うことを聞かないとひどい目に合うぞ、と、おどしているのは、全くみせかけの平和論で、仏教徒としてはそういう点を声を大にして突くべきだと、強い言葉で奮起を促しておられた。これは今日、益々必要な訴えとなって来ているように思われる。それと関連して、他方では、宗教家たちが作っている世界連邦運動を、先生は高く評価しておられる。

因みに、講演の際、先生は、東京大学で指導教官であった宇井伯寿博士が曹洞宗の出身であったこと、そして、中村先生の教えをうけた私がいま学長をつとめているということ、更めて曹洞宗との縁を想い起されたようであった。先生の御講演は研究所の紀要第一号の巻頭に掲載させていただいた。

昨秋ごろ、先生のご健康が少し勝れないことを耳にしたが、日頃頑健で摂生な先生のことではあり、まだまだ御長命とと思っていた。しかし、年末にNHK放送文化賞が決まり、三月になって車椅子で授賞式に臨まれたときは、かなりお疲れの様であった。四月からは東方学院の出講もやめられた由であるが、多忙を理由にとうとうお見舞もしなかったことが悔やまれる。先生はご遺言で密葬は近親者だけでということであったが、私も教えを受けたものたちは、御遺族のご迷惑も顧みず、早速にかけつけ、ご焼香し、通夜、葬儀とお手伝いさせていただいた。拝顔した先生最後のお顔は安らかそのもので、正に涅槃に入られたと申し上げても然るべきであった。東方学院のある聴講生の方が「先生はわたくしたちにとってはお釈迦さま」と言っておられたと聞いたが、左こそと肯かれる。